

## 書 評

泉佐野市史編さん委員会編

『新修泉佐野市史 第12巻 別巻かんがい水利編』

清文堂出版，2006年3月

A4判 146頁 箱入り別刷7点

「第11巻 建築美術編」168頁と合冊で

定価13,000円

大阪湾岸の有力漁村，市場を核に発展した佐野町は，昭和23（1948）年に単独で市制を施行後，同29（1954）年に隣接5か村（南中通，上之郷，長滝，日根野，大土）を合併して現市域が確定した。同市は大阪市の郊外・衛星都市ではあるが，近世には綿や甘蔗，明治期にはそれらに代わって導入された玉葱など投機性の高い商品作物を組み合わせた稲作農業が乏水地域で営まれてきた。地域の約5割はため池灌漑に依存していた。

これに加えて，歴史的には，沿岸漁業や廻船業のみならず，紀州や五島列島・対馬・朝鮮や房総方面へのイワシの通漁が行われ，「佐野網」として全国に名をとどろかせていた<sup>1)</sup>。かつては日本一の生産額を誇ったタオル（初期は輸出用）など特色ある農村工業も存在する。

その市制10周年を記念して，1958年には1冊で史料編も含んだ柴田実編『泉佐野市史』（1958）が刊行されている。この市史の近代の部分はすべて故・西村睦男，浮田典良両氏が分担している。

市域中南部には更新世の中位段丘面が市域に広く分布し，多くのため池によって水田化されているが，かつては荒野として開発が遅れたところである。この開発に関わる著名な中世荘園絵図が正和5（1316）年「日根野荘日根野村荒野絵図」である。絵図記載内容や開発に関する荘園研究は初回の市史刊行後に大いに進展した<sup>2)</sup>。歴史地理学で絵図を人文主義的アプローチで詳細に解説する手法が試みられた時期と重なる<sup>3)</sup>。

1994年に関西国際空港が開港するのを機に，市はその1年前の1993年から15か年計画による本格的な市史編纂を企画した。それが通史編3巻，史料編5巻，別編5巻の全13巻A4判の『新修泉佐野市史』である。本書はその第12巻目にあたる<sup>4)</sup>。全体の編さん委員長は中世荘園史を専門とする

故・小山靖憲（元和歌山大学／帝塚山大学）氏であった。すでに日根荘の史跡指定に関連して詳細な荘域の歴史的な総合調査が大阪府埋蔵文化財協会<sup>5)</sup>（1994）によって実施され，詳細な水利現況調査が行われていた。その追い風で，『かんがい水利編』という全国でもユニークな資料編が計画されたという経緯がある。

しかし時期が悪かった。日本の経済減速期，失われた10年といわれた90年代に刊行がもろに重なった。それでも関西国際空港の波及効果でまだこの地域は例外的な発展をするであろうという楽観論に与し，りんくうタウン，泉佐野コスモポリスという大阪府のビッグプロジェクトが市域の海岸埋立地と丘陵部で続行された。この両プロジェクトは現在，大阪府の三大“負の遺産”の2つとして，府財政破綻の元凶ともいわれている。市自体も，りんくうタウンの未利用地やコスモポリス開発会社の解散（98年）などで税収入のあてが大きくはずれ，財政難から市史編纂に対しても大きな変更を強いらざるを得なくなった。

全体の企画は灌漑水利部会長に任命された奈良女子大学の出田和久氏に託されたが，2002年には財政悪化のためその計画を大幅に順延・先送りする形で，本巻は2011年度の刊行となった。その2年後にはさらなる財政悪化と合併問題により市史刊行計画自体の抜本的見直しが行われ，急遽2005年度刊行，しかも美術編との合冊で分量は半分以下という大幅な計画変更がなされた。普通ならば投げ出したくなる逆風のなか，不十分ではあるが，なんとか刊行に漕ぎ着けた出田部会長や編さん委員会の努力にまず敬意を表したい。調査図を元に慣行の詳細な聞き取りを予定していたが，それも不完全なままにまとめざるを得なかったという。

委員は歴史3名，農学・行政2名，地理4名で，歴史地理分野を中心とした陣容となっていることも出色である。出田氏のほかに地理分野では，土平博，原秀禎，山近博義の3氏が分担している。

本書の構成は以下の通りである。それぞれのタイトルのあとのかっこの数字は，使用ページ数を示す。

## 目次・凡例 (2)

### 序章 かんがい水利編の意義 (2)

#### I 泉佐野市域の農業と水利 (24)

1. 泉佐野市域の農業—都市化による農業の変化過程— (5),
2. 水利開発史概説—水利開発の沿革— (19),  
①地形と水利, ②水利開発の変遷, ③現在の農業水利

#### II 地域・水系ごとの水利開発史 (50)

1. 檜井川水系の水利開発史 (39), ①土丸・大木の水利開発史, ②中・下位段丘面の水利開発史 (日根野・佐野・俵屋), ③下位段丘面の水利開発史 (上之郷・長滝・安松・岡本・檜井)
2. 見出川水系の水利開発史 (6), ①鶴原の水利開発史
3. 佐野川水系の水利開発史 (中庄・湊・瓦屋) (5)

#### III 水利の現況と近年の変化 (28)

1. 大木 (8)
2. 土丸 (5)
3. 上之郷・長滝 (8)
4. 鶴原・瓦屋 (7)

#### IV 水利史料 (39)

あとがき・執筆者一覧等 (3)

この構成とページ配分をみればわかるように、農業と水利開発史の概観をした I 章に続く、II 章の地域水系ごとの水利開発史に最も分量が割かれている。市域の水利は和泉山地からの短小河川が大阪湾に注ぐ。その水系が II の各節となっている。ただ、上の II の水利史と III の水利の現況がその位置や内容に関する対応が一見ただけではわかりづらく、各項目の記述の比重のかけ方も異なっている。都市化の影響が顕著な泉佐野市で、農業水利を理解する農家自体も少なくなり、多くは都市的ライフスタイルに変化している。市民に広く農業水利を理解してもらうためには、もう少し一般読者への配慮が欲しかった。

ただ、現代のかんがい水利は何も農業的利用には限定されていない。生活用水、アメニティ、親水空間としてとして利用など多面的機能が注目される。開発史に重点を置いた水利編だが、今後はこれらの諸機能を水利現況図にどう反映させるか

が重要な踏まえ所となろう。かかる分野に明るく理解のある編さん室体制の整備も、これからの自治体史編さんには急務である。

本巻の最大の目玉は、別刷となっている 7 枚の耕地一筆ごとの水利現況調査地図である。当初は地形や開発過程を考慮して、圃場整備実施直前の現況を記録するという意図があった。しかし刊行スケジュールの変更のなかで、90年代に府の総合調査が行われた市の中央部の日根野荘域を中心とした地域の水利の変化を追跡するという試みは断念された。北部の鶴原・瓦屋地域、南部の檜井川の中上流地域<sup>9)</sup>である大木・土丸と下流の条里施行地における水利現況と、「日根野荘総合調査報告」では抜け落ちていた水利慣行が調査対象となった。

1993年前後の状況を示す2500分の1都市計画図(等高線間隔は平野部で2m)を基図に、範囲を区切って(基本的に水田地域となった)、すべての水路(地中で推定部分は破線)と流れの方向を矢印で示し、水路の立体交差、井堰、溜池、「湧水、井戸、ポンプ等」を一括して小さな濃青色の丸で、さらに1枚の地片(地筆)のなかでの取り入れ口である水口(うすい水色)と排水口である落とし(赤色矢印)を区別し、田越し(水路でなく、2つの地片の境の畦を切ったり樋管を通したりする灌漑方式)を緑色矢印で表示する。ただし、湧水と井戸は異なる記号の方がよかっただろう。

さらに土地利用表現として、田、畑(果樹)、ビニルハウス、荒れ地を含む休耕地、その他の建築物を含む宅地、駐車場を地筆のなかに付加記号でそれぞれ示されている。

隣接する貝塚市や泉南市との境界は茶色の二点鎖線で示されるが、調査区域の範囲が地図上でわかりづらい。区域外からの水路が青色破線で示されるにすぎないからである。また水利現況図の解説でも指摘されているように、現地での観察を図に落としていったため、水口と落としが一致しない部分がでてきたこと、水の流れの方向が特定できなかった箇所もあったという。評者としては、調査区域の外枠が不明瞭であることに加え、細部の決定は容易ではないが、水利領域と関わりの深い大字界や小字界の記入を所望したい。

とりわけ、都市化、スプロールという観点からは、上記の土地利用のうち休耕地や宅地、駐車場

などが変化を示す指標となる。これらを現地で調査したのであれば、基図の色と同じグレーではなく、黒色で描くなどで周囲から際立たせる工夫もあってよかった。

水利現況調査は炎天下で膨大な人海戦術をとられたと推察する。このような地味だが有意義な仕事を実施した市当局の寛大な判断は、後世に貴重な同時代記録を残すこととなり、けだし英断であった。

荘園地域の現況水利から、過去の水利・開発史を志向する詳細な一筆水利調査はこれまでいくつか試みられている。たとえば、琵琶湖湖西沿岸の山門領の中世荘園木津荘域を総合調査した滋賀県立大学の水野章二氏を中心とするグループと地元の新旭町の郷土資料室の合作による現況図は、字界、俗称地名界など、小地名の収集にエネルギーが注がれた<sup>7)</sup>。それを可能にしたのは、地元で住民を巻き込んで水利の意義を説いたまとめ役・裏方の存在であり、地元学（かつての郷土史よりは現代に視点が向いている）の隆盛も大きい。報告書自体が大字の“集合記憶”<sup>8)</sup>として、事物と逐次対応が明示されている意義は大きい。

本書でも、現場観察だけではなく、水路名の旧称、通称などの採集や伝承、水利関係の碑（溜池築造碑、土地改良、用水路完成碑など）も調査区域で図に示すことと、地元住民の集合記憶の活用も考えられた。ただし、より土地との関係が木津荘の事例に比べて希薄なことが予想される泉佐野市の場合、新住民の水意識や地元への知識などの反映も調査で捉えることが地域誌としては意義あろう。

近年の自治体史民俗編で扱われる水にまつわる伝承、大字ごとの住民による水利への認識や知識・知恵を聴き取ることが、本書では時間と費用から十分に行われなかったのは惜しいが、今後、この資料をもとにした地元の知識掘り起こしに活用できる可能性を秘めている。歴史研究者が荘域や史料の所在によって、復原や実証の裏付けとして水利現況調査に目が向くのに対して、自治体史としては市域全体への目配りや面としての連続性が重要な要素となる。

その意味からは、旧・日根野荘域の7つある土地改良区と榎井、岡本、土丸、長坂の4水利組合の近代資料（文書、帳簿、図面）やオーラルヒス

トリーの収集こそ、将来の営農維持や多機能的農村空間の創出のためにも今後必要となろう。コスモポリス跡地利用として、景観を重視した緑地の保全・育成・創造を図る都市公園事業が提案されているが<sup>9)</sup>、里山と溜池の整備などに市史の水利現況調査の経験が活かされることを期待する。

IV章では水利史料が39頁にわたって43点が翻刻掲載されている。うち41点が近世史料である。この近世偏重は、水利の現況から過去を考え、さらに将来を見据えるという本巻の理念からは大きな課題を残すことになった。都市近郊の土地改良区の抱える問題も含めて考えると、近世水利史料はむしろの近世の史料編にゆだねて、変貌激しい水利組合や土地改良区の近現代資料や、それらを主体とした水利誌が重要ではなかったか。

その問題はIIの地域・水系ごとの水利開発史が50頁を割きながら、近世やそれ以前の記述が多いことにも対応する。土丸の文禄3年検地帳関係の小地名が水路や田地面積、筆数などとともに復原された貴重な成果、湧水地名（淵、井、湯など）を採集し図化（16頁）などあるが、明治以降の商

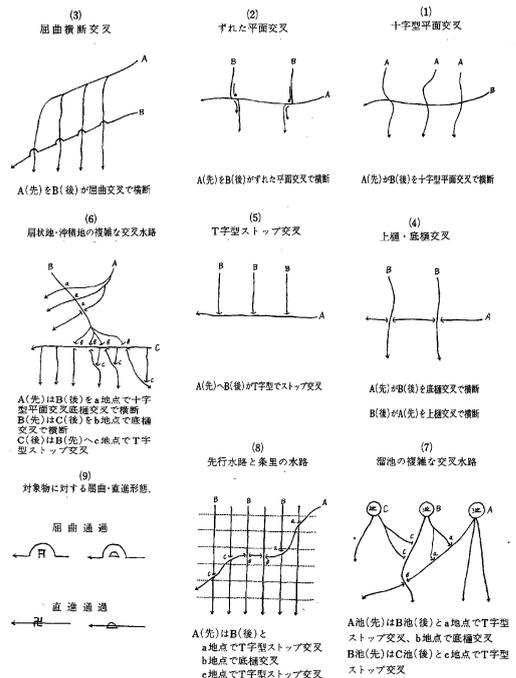


図1 小穴喜一による水路の交差形態  
(小穴1987の図16を一部改変)

業的農業の進展、とりわけ裏作としての玉葱栽培や溜池の新規建設・拡張、親池と子池を連結するシステム化、農村部でのタオル工場立地などによって水需要が増した時期、住宅地化による農地の潰廃などへの記述にもっと頁が割かれてもよかった。北部の幹線水路に小溜池が連結した水利体系の概念図(99頁)のような図がすべてに地域にあって、読み手に複雑な水利をわかりやすく説明する工夫がある。溜池卓越地域だけに大字の水意識も従来は強かったと推定されるが、それは聞き取りの有効性が活かされるフィールドであることを示唆する。

ミクロナ水利現況調査のフロンティアとして、長野県各地、とりわけ郷土である安曇野を中心に戦後地道な水利調査をほとんど独力で行い、開発史を水利系統から考察した小穴喜一氏の業績が想起される<sup>10)</sup>。氏の方法は、更埴市(現・千曲市)の条里地割の発掘調査に伴う整形された水利系統で明らかにされたように、交叉する2本の水路のどちらが上になるかで新旧関係を判断できるというきわめて単純だが重要な原理が基本となる。さらに耕土の深さ(氏は1枚ごとに検土杖で測定)や水路間の交叉形態から開発の新旧を推定する微にいった手法は大いに参照されるべきだろう(図1)。今後、労作である水利現況図を死蔵させないために、史料をいったん離れた水利の形態分析も歴史地理学に課された領分である。

近年の自治体史で水利をより大きな生活環境という視点でとらえ、「渇水、農業水利、土地利用など市民の生活と環境のかかわりを重視し、太宰府の自然環境の記録として将来の環境調査に役立つ」ことを意図した『太宰府市史 環境資料編』は、自然地理と歴史地理の合作としてひとつのヒントを与える<sup>11)</sup>。

江戸川と中川にはさまれた水害常襲地帯である埼玉県三郷市の市史の最終巻として刊行された水利水害編<sup>12)</sup>は、水害と水利が史料や民俗・儀礼、地形変遷、農業技術、水道や河川交通までかわるかを、原始古代から現在まで650頁にわたって図版や写真をまじえ平易に述べた個別通史である(総監修者は所理喜夫氏)。内容のバランス、分担執筆者の専門分野、編さん室のとりまとめ方など、水・水利に関わるテーマ別自治体史の一つのモデルになるものと思われる。

最後に、人口規模、財政状況の異なる市・町・村史にいくつか関わった評者の経験から、近年の自治体史編さん室の悲鳴に触れたい。それは自治体史自体が売れないことである。もともと多くの自治体史の価格設定は、印刷部数を考えると、コストを度外視した低めの設定になっている。それでも一般市民は高いと感じる。

従来、主要な大口購入者は公立図書館と大学図書館であった。ところが公立図書館は地方財政の悪化に伴い、図書購入予算が大幅削減されている。大学図書館も経営が厳しさを増すなか、増え続ける書籍の収納スペースの問題や電子ジャーナルなどへの支出によって図書購入費の抑制が顕著である。地元住民の購入も若年層ではほとんど期待できず<sup>13)</sup>、研究者個人での購入も近年明らかに減少しているのが全国的な傾向である。

その一方で、明るい話題もある。自治体史編纂における新しいメディアの普及である。デジタルカメラによる資料撮影、電子媒体での保存によるコスト削減は、資料の画像改変による同一性の保証という課題や、マイクロフィルムに比べると保存性にやや難は残るものの、飛躍的な撮影可能枚数の増加と紙焼コストの大幅な削減をもたらし、閲覧の容易性と収納スペースの節約を飛躍的に向上させた。

ビジネスの世界での書類がA4判で標準化したのに伴い、自治体史も大型化し、A4判が出現してきた。『新修泉佐野市史』もその流れのなかにある。地図・図版が複雑な場合は、明らかに大判化のメリットはある。ところが、図書館の収納棚はB5判かA5判を標準としているため、A4判以上の大型書籍は別置なるか、横に寝かせて配架される。開架図書の場合は見逃すこともあり得るし、図書館運営からは既存スペースの変更を迫られるなど問題も多い。自治体史という後世に残るべき意義ある仕事をこれ以上縮小させないようにするには、むやみな大判化は慎むべき時機に来ているのではないだろうか。

その代わりに、印刷コストの削減にはDVDなどに撮影資料で冊子体には収まりきれないものを収録し、裏表紙などにポケットを設けて入れるなどの所作がこれからは推進されるべきだろう。地図資料のカラー撮影に多くの費用を要していた問題もこれで一部は解消する。絵はがき、石碑、看

板、景観写真・空中写真などの非文書史料も収録可能である。

これまでほとんど歴史学畑の出身者が中心であった自治体史の編纂業務に、歴史地理を学んだ者が貢献できる可能性も増えてきた。学界もまきこんでアピールし、大学院生・若手研究者がでも自治体史の利用者としてのみならず、地道な基礎的な編さん業務に関わりながら、新たな業績を蓄積することが、迂遠なようでも歴史地理学隆盛の正道であり、オーバードクター問題へのひとつの処方箋ともなる。泉佐野市史における水利編調査のような場を提供することが、安易な言説研究にいきがちな「新しい歴史地理学」に、研究の地力と他学問からの評価認知を高める機会となることを期待したい。(野間晴雄)

#### 〔注〕

- 1) 土平 博「泉州の漁港から関西国際空港の玄関口へ」、平岡昭利・野間晴雄編『近畿Ⅱ地図で読む百年—大阪・兵庫・和歌山—』、古今書院、2006、19～24頁。
- 2) 小山靖憲「荘園村落の開発と景観」(小山靖憲・佐藤和彦編『絵図にみる荘園の世界』、東京大学出版会、1987)。小山靖憲「『正和五年日根野村絵図』再考」、泉佐野市史研究1、1995。初期の業績としては、水田義一「台地上に位置する庄園村落の歴史地理学的研究」、史林55-2、1972、103～130頁。
- 3) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上巻・下巻』、地人書房、1988。
- 4) 歴史地理学がかかわった巻として、泉佐野市史編さん委員会編『新修泉佐野市史 第13巻別巻絵図地図編』、1999、がある。この本に関しては、海道静香氏が歴史地理学204、2001、53～54頁に文献紹介をした。
- 5) 大阪府埋蔵文化財協会編『日根荘総合調査報告書』、大阪府埋蔵文化財協会、1994。
- 6) 額田雅裕・古田昇「泉佐野平野の地形とその変化—天和三年日根野村上之郷村川論絵図と完新世段丘—」、和歌山地理14、1994、31～44頁。古田昇『平野の環境歴史学』、古今書院、2005、113～116、153～173頁。
- 7) 新旭町郷土資料室編・近江国木津荘調査団『滋賀県高島郡新旭町 近江国木津荘現況調査報告書Ⅰ』、2002、新旭町教育委員会。『同Ⅱ』、2003、新旭町教育委員会。水野章二編『中世村落の景観と環境—山門領近江国木津荘—』、思文閣出版、2004。
- 8) 評者も関わった、脇田健一編『水利形態の詳細復元による地域環境史の総合的把握—扇状地・滋賀県甲良町を事例に』、平成11年度滋賀県琵琶湖博物館研究報告書、2000、参照。
- 9) 大阪府泉佐野丘陵部土地利用検討委員会『泉佐野コスモポリス跡地の土地利用について提言』、2006。
- 10) 小穴喜一『土と水から歴史を探る—古代・中世の用水路を軸として—』、信毎書籍出版センター、1987。豊科町誌編纂委員会編『豊科町誌 歴史編・民俗編・水利編』、豊科町誌刊行会、1995。
- 11) 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史 環境資料編』、太宰府市、2001。
- 12) 三郷市史編さん委員会編『三郷市史第10巻別編水利水害編』、三郷市、2000。
- 13) 野間晴雄「地域誌・自治体史の解剖学—地域社会の語りと行政・滋賀県を中心に—(要旨)」、人文地理52-6、2000、78～79頁。